



Title	国民社会の研究各論 第一章 通巻第十四巻：生業構造
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1963-07-19
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77522
Type	manuscript
Note	国民社会の研究各論 第5章：国民社会の社会構造 『鈴木栄太郎著作集7（国民社会学原理ノート）』を出版した際のソースとなった原稿である（同書内での言及による）。
File Information	1031_0137414.pdf



[Instructions for use](#)

各論二(1)(今訂正)

2

K-1

19

— NOTE BOOK —

生 ~~活~~ 構 ⁴ 造
業

國民社會の研究

各論

才 = ~~冊~~ 章

(通卷才十四卷)

昭和二十七年四月十四日



スパルタノートの
連続発売品

DAIWA
240

SPARTA NOTE

2

CONTENTS

國民教育の発展と教育行政の改革
國民教育の発展と教育行政の改革

十五卷の諸問題討究による「國民教育」の
における問題のあきらかさとその大体的
方向とがおぼろげながら定まらざる様
あゝからこれから各論の進捗に向つて
行く。十五卷を終了するまでに約三年半
を要している。各論の進捗が今から何
年かよかまた見当もつかない。今からは
取り廻りやすい明白な事項が少く
けて行きたいと思つていふ。

昭和二十七年四月十四日

□ 民生学における生活構造

ここで私は□ 民の生活を生業に因す。生活
とその他の生活に因す。生活との二つの領域
に分けていふ。経済のみならず生産生活と消
費生活との二つの面に分けていふ。今の
都市生活者についていふ。職場における
生活と家庭生活における生活の二つの面であ
る。

動物の習性からいへば現代都市の生活
に至るまで二つの生活の面の区分はよほ
と根深い根柢をもち、その根柢は見え
ぬ。人が生業に從うすはとその他

の生活に從事してゐる時とては、人の心の強水も
も慣行制度の型も質的に固着してゐる形
に見えよ。一方は合理的一方は情義的
と割り切つて居る程、こゝも大した各別は
たゞの程である。

新カニにわたる生活構造は右に述べてゐる
様な生業がいはゆる生活の構造に
ある。新カニの民衆にかけよ曰民
の生活の構造を明かにする為には
次の如き問が一度究明されるべき
はたしぬと思つてゐる。

一、口民衆の統一性は何の爲にあるか

一 口民と土地

一 土地と支配者

一 人の宿命

一 宿命（による）の中にある生活の型

一 生活の型の基本的な形式の

一 孤立の生活の不便不利不快

一 孤立生活の基本條件

a. 言語を介した交流文化

b. 生業（文化と生業）・社会・交易関係

c. 統治

d. 通婚（血縁者文化）

e. 生活文化、消費又は購買文化

一、書簡の六百十年の中口人生活

一、然し人は文化社会の中にお生したのであるが

最低限の社会条件の才を養え、必要は
厚い。

一人は生れたが、(一)社会と文化の中で
成長したものである。

一人は系属、文化内の家系族の中に
出生成長したと云ふから、家系を

始つていふのである。

一、日本では従来昔男は生家、親の居
可に、より次男以下及、娘は嫁、
による他の家を始め、他の家に

入るかある家族文化の中に生活して来た。
た。

た。

一 又人は青年期をまた、父母の教養の生活をついけ青年期の^{中の}一か半業に
ついて、老衰するまで半業をついける
のか半業であった。成熟した者は半業をついける
一 今日日本人の家族文化は急激に度
節しつつある。

一 古の度節は農村と都市でテンホが
多か異なり、その方向は一極である。

一 都市と農村は然る節の機同の有無
に過かたないが、又家族文化は同じ

未知人の死と未知人の死の別
よるか
本であつて、その結果死を精選
とせよ。

方向の動い、い、か、都市文化と
史打文化は甚しく異なつてゐる。口唇
生活を中心とし都市生活の二分してゐる
一都市と農村の生活文化の根本的
相異は其死を精選の別と生活
精選の別から生じてゐる。

一農村は生活内容の単一、同族の面
積、家族単位の集居、その区劃的編
成の原理は地域の別以外にはた
い。櫻葉果園は多くは同一地区の上
に重複してゐる。
これに對し都市は生活内容の多岐、

の団体

異質の非而識をの他人界上位の職
場と家族と同居団体とは完全に
分離してゐる。その為この二つの集團
を粹として形成される多くの社会生活
は農村における同一地域に於て種々
集團活動に見られるものと全く異な
るものとなつてゐる。社会構造の根本
的相異である。民衆を異質的に
分離するよりはる長に社会生活の理
解に必要である。

次に生活構造の相異も見逃しな
ないものがある。

必要

二、この生活精選と云ふのは生活活動

(生活活動以外の)の為人が任意より

ほかにして社会に接過税を課する

及至後述の如く同様の社会的活動

の形である。に思ふべき私は都市の社会生活

の中心かくの如く形を社会生活地区

としての生活地区としての生活地区として課

税の形であるか、同様のものは農村に

おいては全く異なり、圆形として第一

の形はなからぬ。

第二、農村に於ては第一生活地区としての生活地

区としての生活地区は存在すると思ふ

はか、ニては其の何れも村人は皆、平行線
を画すてあらず。即ち村人は皆同様に
A 界外とA₁と都市とA₂とA₃と十戸都
市に同仕すてあらず。

四月十四日

凡そ都市性は村界外に描画
加勢加すすと未知人の増加す
と全脱化が増すを原脱的な
過脱としていふから、原脱精
進や生活構造の都市性村の形は
都市化による。全脱化がなうさせぬ
てあるともいふ。

總て全脱化の過脱が都市性を忠告

より区別せしめよう。

都市化と昔の規範的文化である。宗

教道統も言語・神儀すらも合致

（革新）然る生業も宗族

化す。しなのは法と経済のみの

て身。と芸術

最も没収な法と最も感情的な

芸術、のすか合致化しなの法

芸術ありである。一々の花に法

と力、一々の花に感情と愛、その内

に人間生活がある。

一口民衆の生活構造として第一

（現在の時上尖において物を至る）
過去と未来にも同心の中心に在る

（来）
構造の支子 序説 系

（百層）
口民記をいける

（二）
口民記をいける

（五）
交流文化 生活構造（一三三）

（環）
生活文化と宗教芸術

（子）
道徳 近代化のもの

（記）
統治現象と階級

（記）
統治現象と階級

（記）
統治現象と階級

（記）
統治現象と階級

（記）
統治現象と階級

（記）
統治現象と階級

（記）
統治現象と階級

（記）
統治現象と階級

（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）

（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）

と政治

第二章 上下統感 (階級階級)

第三章 社会流弊

各體と

第四章 協力関係の秩序

第五章 協力の秩序的空間的秩序

序と承服の限界

第六章 承服の限界と革命

日本は革命の寸前にある。

三十七年

四月十八日此項目を決定す

分布と居住分布

同異同
財財財財

現在日本での
各比率如何

調査
同居関係
同居関係

第一等

同居関係 同財関係

同居関係は矢張り

家族には家族を意味するものである。家族

あり大であるが家族は必ずしも大である。家族

甚だしく完全に一家族一同財関係である

しといふ場合には寧ろ少い。又家族と同居

しといふ同居関係も同居関係と同居関係

と同居関係は同居関係と同居関係

であるから、今日では社会階級を以ては同居

によつて同居関係は同居関係の調査を行はるべき

を停止して寝にしているものである。甚だ少く

の例外なものは同居関係は同居関係として同居

湖

に促さる水付。

普通

家族を言ふは同居団体を世帯と呼び非家族

員の集合体を行ふは独身寮や船舶や旅

館の如きを準世帯と呼ぶ場合のその形は準

世帯も年毎に増加す。傾向を云ふは。

日本の戦前までの家族型は直系家族型で

あつたが戦後民法におよぶ家族制度の放棄

と共にアメリカ文化の急激な流入によつて個人主

義化、自由主義化、民主主義化、合理主義化の

動向の内に夫婦家族型の家族が俄かに増

加しつゝある。

戦後の工業の發達は國民の一人くを存する

農學其本
新生活運動

職場に於て、一家族の若もそれ<の職場に於
てゝ場合が多くなつた。直に家族は農村に多
く見られ、俄向に下あつたが、多れは農家の生業
協力係として、家族は皆之の生業の農學に秀加
ていた。この家族は皆之の生業の農學に秀加
は容易になつた。今では、男も女も皆以
て是を「^雇」_{を考へ}、有利な職場を打つて、都市の工業に秀
かしてゐる。

農村に於ては、夫婦のみか、時には老婦人のみ
が耕作に從事せしむる風になつた。

舊權威を失つた老人は男を以てして、
家の片隅に最底の生活に甘んじ、すくなく

最後

と、尚、扶養せしむるに保証されず、かゝる
さいと、死んで行くと思ふのが、今からの
日本の老人の運命の極である。今来て
は、物乞ひのやうな全一力み返して、老人が
權威づける時代といふところを、我々が
先づのうしろを、その分が、かゝる、かゝる
は、当然である。
日本は、及ぶ、東洋は
人々、下は、老人、天の、世界、である、た
これからは、来日、天の、世界、である、
である。これは、我々の、生活の、状態、は
尤も、好まぬ、である。

此、同居、団体、に、つ、つ、の、理、解、は、この、団体

の機能の多岐に抑はりなく国民統合
の機能に依りて第一の據点として重
要である。国民統合の第一は關係が
統合化の累進であるかともかきも合
は同質としていふことはなからぬ。

維新の歩路をたどる第一は同質團體は
家族であつた。家族は常に同質團
體をなしてゐた。それが遂に漸次同質
團體と家族の外周がずれて来た
が最近迄の傾向は強しくなつた。第一は
明治時代までは、家族即ち同質關係
が社会生活の累進をなしてゐたが、その

均漸次、個人が社会生活の単位となつて来た。

才五の、家族の個人化の必要が生じたのは、せいぜい、早くも、この頃である。直子、宗徳、型か、夫婦、家族型に替へなければならぬ。はなはだ、なくなつて来た。

才五は、未婚、家族型、たゞ、この家の、先祖の存続を、予て、せしめて、この家の、觀念、の消滅、となつた。

才五は、夫婦、家族型、は、仲介、に、昔、年、天、口、を、踏、果、し、直子、宗徳、が、感、動、して、この、片、の、老人、矢口、を、お、お、と、は、い、つ、

しまし左。

この案の立案は合理的、主権自守の
義、民を主権の近代思想に啓蒙
し、平好しつるもので、皇室に
おける清く
と義化の進行に共調を令せし
たすも、平好である。

我々今朝、自覚を致し、民を
義の思想に急進し、特にこ
れを皇室の根本に於て
展は甚く、甚しく、左の
爲に、同族
係と宗族の分別を、夫婦流儀の
急務、老人不口の没可憐の
仇打

条件がいろいろなつて来た。

「民は皆何かの業場や店に依る事

がなしては今日昔も強と貧弱を分

かあ。差別階級の自然階級に何人

も中口よりの潤滑者たる室は若物

が故にその依りて来た。

お流記をぬくの(1)民の生活はその

な構造と生活構造と業場と都市

とは質的の因果である。然し両者の同

期は截然として区別が両世帯に存す

てはなく、業場が都市的に存し、職が

存してはむしろ、相互にほわさくたある

*を組織するに依るのなる。都市
では異質的な生活内容の人が多いため
集団は機能により組織される場合
が多い。このことは地域
である。このことは職業を主とし構成する
五枚あり△へ

所詮は
社会の質的相違は居住中心の生活と職
業中心の生活の違ひなりあるかある
。 「これ」
いはば市民の生活は居住を中心とし
行はれ、都市では職業を中心とし
行はれる。であるが、社会構成の違ひは
これと密接な関係が大きい。物
の、包々の生活の面では、集
団同一の地域の線の上には、質が異
なるといふ。農村では市民の生活内
容が異なり、同質化しないから、故
の組織に依りて地域別に集団

#

才二帝 原の藩札

高交 十村 伍の上室から日本の各地へ

河川に沿って大小の

屋群園が見えぬよりである。

交通路線は、位置して、集落のなか

皮の厚みの稠密度も高く、高松の

橋も多きといふが、交通路

の強さ異なつて、大さな

材は、は、

漢船業によつて、見分け

交通路線の、木を

の稠密した都市下、あま

の都市の様式、一見して

多くの煙突から黒煙が流れ出し
やがての交通は飛石橋園がたえま
に三に集まり、空より放教して
こんな静さは紫山溪村の静けさ
は全然見えない。

那市と中村とはその要路の外見
目も明らかなに現はれていゝ。都府
へや物が集ま散すところ、中村は
やがての集散が強し、見よる位に
ふとととと

百餘名内部の人々の学造物は農山漁
村では大勢分民家作である。神社や
の寺や~~女~~船丁り回があるところもある。
ここにも道路はあつたが、村の人達しか使
ひなかつた。程々の山の下である。

川筋の外畑が豊村を囲むのは、民
家の外に大きな層層よの又行旅
の機屋としての宿屋造りか加はつてい
事」と孝通 通行人の施設が是こから
方にあつていふ事である。

おき新着のものは、外籠上の右の如
相違しは全口土を漏して比る一際

あ。



五枚券の⑤⑥にっなが。

△五枚前より

集団の

おれの仕事構造は累積する大中小の
域的昇位に最も重要な特徴が
これ、都市の仕事構造は世界
職場の中心軸とする二元性格
その特徴を見出すのである。

生活構造は生活の空間的時空的振
いの空間的なるものの構造を意味する
ものである。空間的振幅が甚大
である。

より規則的 又

出立の不安同的にも秩序的にも振幅が

大きくなるといわれる。これは社会的交流

の線が都市ではより整備された大規模

なこのように同化するものと思はれる。

一般の農村は都市に比して生活が

より住居中心であり、都市ではその為

地区的であらうに對して、都市では

住居も社会関係の中心を占めるがよ

くも職場が生活の場を占める。

な集団の都市では職場が中心を占

めとして構成される場合が多い。

次に消費生活の依存地区の大小

都市における生活の理解
の中心

生活地区

この三つの地区を示した第一生活地区と第二生活地区と第三生活地区の構
造は、自然村と都市と、と人々の間に
あるところか。

自然村では生活地区は、自然村の中の何れ
の回りの自然村と同じ。
都市も第一地区と第二地区にもち第一
生活地区も第二生活地区も皆、共通に
あるところか。

要調書

生活地区は、自然村と都市と、と人々の間に
ある生活地区も第二生活地区も皆、共通に
あるところか。

要調書

自然村と都市と、と人々の間に
ある生活地区も第二生活地区も皆、共通に
あるところか。

要都市生活地域
に都市の指定地域
指定区域の調査

要調査

都市生活時間とは農村に比べて多少の時間的
余裕を有して強いて生活時間を共同
してと考へる。

都市では生業生活の型の相違に
あつて午差可部の生活時間があるより
片元「かよが」然し三回の食事の
間の休息と七八時間の勤務と
一時乃至十時間の生業生活が
あるより、生業生活は毎日の
生活時間と選別さるゝと考へる
決定的であると思はれる。その意味
あつて何れの職場にても共通な生活の

型が自ら存してゐると見よると出来ぬ。

人の生活の
根本原理

人の生活は千差万別であるが、人は
根本原理(又は習俗)としての生活には特別の

用心をこめてゐる。一日の中の生活もよつて

可なり、若くは多く生業の為に用ひ、生業

に因して、又ほつとあつた合群性や職業性

を著し、若くは又ほ自分の我保を欲

望むが故に、社会としての生活の不安定と

発原を希冀してゐるかの様に思はれる。

生業の本據は職場であり、その他の

生活の本據は世住居である。農村では

住居が同時に職場であるが、都市化

すゝにこの職場は住居が、増えして
行く。職場の生活が住居内の生活に
く混ざり合ひ、さけには両者は
独立してゐる。かたがたのほあ然とある
都市生活には職場生活と世帯生活
とは全く別な世界を形成してゐる。
そこで、民生生活一般を視解する場
合に、生業生活即ち職場生活と住居
生活即ち家族生活とは別に取らば
ほゞやゝ別し大なる生活区別を
おぼしめると云い、未分化の様に見る
水の異なる生活に於いては、矢張り両者

は別に考察する可き本帳を以つての
であることは明かである。
その女子轉入の生業生活は固く現
解は口民生活中の累年一部門では
なく、他の生活^{部の}生活^にに^も匹敵する。特別の
一大部門として之を改めし論及す
る必要がある。

第三節 交流文化

今日の口説文化の急速な成長は皆
直接には交流文化の隆盛に因りて
いふと可なりかと思ふ。

現時真と昔年かと十年か二十年
前四十餘年前と比較して新は是れを何れと現

在の中の変化とて体験して（昔の）

この体験の中の隆盛のテリ。亦は過去

にも未だ未だもその比を見ないと思ふ。

現象であらうか。知れぬが、然し交流

文化の隆盛の方向はこれと違ひなく

なりはる低きと見る可きか。交流文

化は絶えず進歩し、その上に人同文化

の発展が直進している様に思はれる。
今日交流文化して和字は何を思ひ出
すのぞかあか。

和—言語・儀神・文字

和字は余り人と物ぬ心の交流
の用具として最近の聖と進歩
に当惑している位である。

人の交流の用具として「チエツト」機は
教時字で米に行くとかある人エ
街の正月（の福行を物案しているよ。
南極にも北極にもヒマラヤの山にも
地球上の人が行けぬところはないよ

甚く遠隔の巨骨の向かい交流が可
能なる事を明かにしてゐる。

証明してゐる。時代の甚だ精神に密回
物の交流の因果は人の交流の因果
をそのまゝに利用する事がある。
心の交流の因果としては電波技術
の甚しい進歩はよく今日では人は
世界中何れの土地の向かいでも通
信連絡する事が出来、世界各地の
年々なるものは教諭の内に世界中に
テレビ^カ送るの形と其の音を伴ふ、新聞
は半日の中に其の詳細な記事
を載せてゐる。

然し私は ~~中~~ 半世紀前、私がか

今年の頃は、ワラワラして歩いていて、大隈村と
の間に新道が出来た。その上に馬車
が通じはじめた時の感激を、おぼえてい
道路は、冬補修をせよ、自御車が通じ
電話が出来ない、他村の親戚
ではなくなるといふ、
けれど、直接歩いて行く、直接
に昇るといふ心をもつ、
の記憶は、ほろりする
けれど、この道は、こんな感じの交流
用、
今年も昔と変わらず、道路は、
今年も

ず。馬車すら通じないところも少なくは

ない。業々皆は何一つなく、總べての生活も

大した変化を来してはいないか、ラフォーと

新聞が格段の進歩を上げて、この都市

の生活をより世界の如きもの様に傳之

ていよ。及ぶ範囲が広い地域の

交流の中心になつて、都市生活

の向上が見え、交流路線の細い糸

村枝状に細かく行くと

終つて、たがひの純粋な生活の停滞

が見え、そのは明かであるか、それが

と、日ならず程由によつてものが遠及しな

はなつた。

都市は益甚しく近代化し合衆化し

明々となつていゝよりは其の外島を

目見た丈でも不明か下あるか、都市

衆持は个々厚古の傳統に支配され

暗い生活かつていゝより船舶

かの務下ある。

口民誌

口民生活にかけこの相違は交流

路線の組織における位置に因り

ていゝよりは抑々か下あるか、交流路

線上の位置等の比のかが二部の二つ

界を本質的に区分せしむる原因

で出なく統治現象における統治方針

的交差流の意味

言語の神字による人同直接結合に

のけよ交差流の制約

甲か乙か、乙か丙に、丙か丁に丁が

Nにとよは是令に直接人同同位

甲よりNに及、不甲とNとの

同に能令的交流系と認めよ。

之の場合、Nは口境線内の口

のサイハテの人か、口境線をのりこ

他口内の人か、地味を一まわり

してNは甲に復帰するのうか。

是令同位の流氷が甲よりNには

と神統治所の令の有是量によるものにあ

ることは神三祭による昭示となるであ

る。

言語儀禮文字の共同領域の程

鮮は証令的交流現象の遠及の端緒

に必要である。

同一の民族不ありから同一の言語や儀

神や文字の共用していよと考ふ可や文字は

なく、同一の言語や儀禮や文字の共用とい

いよから同一の民族と認めらるるの

である。民族は常この口泉共同圏の

展跡である。

展跡

ふか、~~N~~Nより甲には至らない場合もあり
る。この場合は交流が一方的に存在す
る。Nを介して甲まで下はさ
ないが、乙まで下はさす。場合によ
らぬ。

本では統合は交流の流れは主として首
尾にかけ、甲より登り、^{Nは皆}口境線内の
民である。Nより甲に至る場合は

外的である。口内各地のNより集
まる材料に加えて文化の移動を甲

Nに送りつけ、形が口内文化の
本格的な発展過程と云えるか、首

曾この口内統一の強制によって書
字・文字の共同と同じく、宗教
及び芸術も同一の統治活動の下に
おいては至ると同じ文化仲や娯
楽を共有する。同一の強制される
い先下ありから、古い文化の
の通路であったこの原種という
概念は、芸術の共同性を示す
民族性^{共同}の要件に考へよるべき
である。

③

都の甲は今日では思想においてソ連
の先進者に劣ると言われるのを存続とし
て利用する場合甚だ多く、又先進者
化においては米国の先進者に劣ると
言われるのを存続として、場合か甚だ多
い。この字の存続の利用の爲に日本
文化の近歩の成長の弱つて、尤も
此の「誤」ではあるが、古くは日本の
が、是れよく失はれてゐる。場面と
是れ成